平和研究の課題

中　山　弘　正
（PRIME 客員所員）

海上自衛隊の戦艦が「海賊」を退治するとして、法律さえ未だ出来ないうちに、外国に派遣される、という驚くべき暴挙が行われる時代になった。また、空幕長田母神なる人物は、「日本が侵略国家だったというのは濡れ衣である」と全く間違った発言をして、更迭になったが、その後もあちらこちらで同じ発言をして歩いている。彼を呼ぶ人が沢山居るのである。そして、憲法９条をはじめ「改正」への国会内での準備は着々と進んでいるのである。

「平和研究」は、どれ程小さなものであっても「平和を創り出す」実践活動と結びついていなければならない。私の場合は靖国神社（目下は一宗教法人）を国営化しようとする動きに反対して、「靖国神社国営化反対福音主義キリスト者の集い」という小さな集団で、40年来活動を続けてきた。代表は西川重則氏で、この６月30日にも靖国神社法案提出40年を覚えての公開学習会で講演された。彼は「平和遺族会全国連絡会」の代表や「政教分離の侵害を監視する全国会議」の事務局長等々多数の平和運動でもリーダーを務めている方である。ごく最近『有事法制下の靖国神社』（梨の木舎）を出版された。「国会傍聴10年、わたしが見たこと聞いたこと」というサブタイトルが付いているように、熱心に国会傍聴をも続けられてきた。

私は明治学院の学院長時代（1994～97年度）に、現在の大学長大西晴樹氏等々多数の同志とともに敗戦50年を期して「明治学院の戦争責任・戦後責任の告白」（この「告白」文は、国際平和研究所のサイトで９ヶ国語の外国語翻訳を見ることができる。スワヒリ語、アラビア語も含まれている。流石は平和研だと私も感激した。）を公にしたが、私個人としては、それ以前の27年間にわたる西川氏らとの上記の「ヤスクニ運動」や学びがあったのであるし、当然、大学の定年後の今もそれは続けているのである。西川氏には、『靖国法案の五年』、『靖国法案の展望』（いずれも、すぐ書房）等、多数の著作もある。

ヤスクニの「集い」は、キリスト者の自分が「神社」「英霊」といった偶像を拝むことは出来ない、という信仰的立場が出発点になっているともいえるが、もっと広い立場の方々とも連帯して「平和を創り出す」活動に加わっているのが「９条連」である。

「憲法９条―世界へ未来へ連絡会」（03-3442-2333）である。これは、国鉄民営化・国労解体路線がとられた後に、「JR 総連」という新労組が呼びかけて、事務局をそこが引き受け発足したもので、いわゆる「９条の会」（加藤周一・大江健三郎氏ら）よりも、実は10年も早くスタートした。伊藤成彦・浅井基文・樋口陽一氏らとともに９名もの複数代表の１人として加えさせていただいている。『９条連ニュース』の創刊が1995年１月、もう No.174を数えるが、実に全国の津々浦々で、いろいろな諸団体・グループとも肩を組みながら平和運動が行われていることがわかる。沖縄の

「集団自決」の問題・大阪大空襲訴訟の問題等々が最新号で報じられている。「日本の植民地支配100年を前に、日本軍『慰安婦』問題の解決に向けて、ソウル・日本大使館前で、866回目の水曜デモ」といった報道もされている。高齢化したハルモニ達も参加しておられたとのこと……。

以上、「ヤスクニの集い」と「9条連」を掲げてみたが、明治学院大学国際平和研究所が、南北アメリカ、アジア、ヨーロッパ、アフリカ等々の広がりで、「平和」を求めての人々の動き、その歴史、その理論等々をキャッチし、研究し、連帯し、実践する力となっていることは何と素晴らしいことであろうか。

経済学部に1コマだけ、「キリスト教と経済」で出講しているが、ヤスクニのことなど反論する学生諸君なども増えて来た。当然だと思っている。全く新しい世代なのである。実践と研究とで説得していかねばならない。

「平和をつくり出す人たちは、さいわいである。彼らは神の子と呼ばれるであろう。」(マタイ 5:9)

〈2009年8月〉